



しおかぜ通信

学校教育目標 「自ら学ぶ子供」

八代市立郡築小学校
校長 村嶋 博史

R7,10,31 No,24



学力向上の鍵「非認知能力」とは？

非認知能力とは、「自分の感情をコントロールする力」や「忍耐強く物事に取り組む力」、「我慢する力」、「自分をやる気にさせる力」、「集中力」など、学力のような知的能力に直接含まれない能力のことです。

※ちなみに、認知能力とは、「読み書きや計算」、「論理的思考」、「記憶」、「判断」など、学力テストで数値化できる知的能力のことです。

非認知能力は、学習に直接役立つものではありませんが、勉強に向かう姿勢や学習内容を定着させる過程で役立つものです。最近の研究では、この非認知能力が学力向上の鍵とも言われています。

たとえ、知的能力が高くても、やる気や忍耐力（我慢する力）がなければ将来的に学力は向上しないものです。

例えば、家庭学習や復習の際に、分からないうことが多い、やる気を失いそうになったときでも何とか分かるようになりたいと粘り強く勉強する子供と、投げ出してしまった子供では、その後の学力に大きな差ができます。また、動画やゲーム、メールなどの誘惑に負けずにやるべき勉強をする子供と、誘惑に負けて勉強をさぼってしまう子供でも、その後の学力差は歴然です。

やる気や忍耐力（我慢する力）があるかどうか、つまり自己コントロールができるかどうかが、学力向上の鍵となります。



この非認知能力の中核を成す自己コントロール力に係る研究で有名なものに、心理学者ミシェルたちが行った満足遅延課題を用いた実験があります。

これは、マシュマロ・テストとも呼ばれ、子供にマシュマロを見せて、今すぐ食べるなら1個あげるが、研究者がいったん席を外して戻るまで待てたら2個あげると告げ、待つことができるか、それとも待てずに食べてしまうかを試すという、より大きな目標のために欲求充足を先延ばしできるかどうかをみるための実験です。

ミシェルたちは、保育園児550人以上にマシュマロ・テストを実施し、その子供たちの追跡調査（青年期、成人初期や中年期）を行った結果、幼児期により大きな満足のために欲求充足を延期することができた者（=我慢できた子供）は、10年後の青年期には、欲求不満に陥るような状況でも強い自制心を示し、誘惑に負けることが少なく、集中すべき場面では気が散らずに集中でき、ストレスにさらされても取り乱さずに建設的な行動をとりやすいことがわかったそうです。

さらに、20代後半になったときも、長期的目標を達成するのが得意で、高学歴を手に入れ、対人関係もうまくやっていくことができるなど、自己コントロールがきちんとできていることを確認したそうです。また、その40年後の中年期になっても、相変わらず高い自己コントロール力を維持していたそうです。

これは、幼児期の子供だけではなく、中学生を対象とした調査研究でも、自己コントロール力の向上がその後の学業成績の向上につながっていくことが確認されたそうです。

このことから、子供の頃に身に付けた非認知能力（やる気や忍耐力、我慢する力など）が、10年後や20年後、さらには40年後の自己コントロール力となり、それが幸福感につながることが示されました。

学校というコミュニティで、教師の様々な調整の中、子供たちは「相手の気持ちを想像し尊重する力」や「目標に向かって粘り強く取り組む力」、「自分の感情をコントロールする力」、「多様な人と協力して物事を進める力」、「日々の生活のスケジュールを自分で管理する力」など数値では測りにくい内面的なスキル、いわゆる「非認知能力」を獲得しています。

私たち教職員は、今後も子供たちの将来の幸福を目指し、コミュニケーションを通して、子供たちに自己コントロール力（=自己指導能力）を育てていきます。

次号では、非認知能力の一つである「やる気や忍耐力（我慢する力）」の育て方についてご紹介します。

